

Title	シンポジウム : Rational animals, irrational humans
Sub Title	
Author	山崎, 由美子(Yamazaki, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2007
Jtitle	活動報告書 Vol.1, (2007.) ,p.27- 28
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章 : シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20080300-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

開催日	2008年2月9-11日
企画班	全体
企画者	渡辺 茂、岡田光弘
講演者	9日 D. Lestel (ENS, France), A. Blaisdell (UCLA, USA), A. von Bayern (Univ. Cambridge, UK), C. Schlägl (KLF, Austria), L. Castro (Univ. Iowa, USA), A. Seed (MPI, Germany), E. Freidin (Univ. Oxford, UK), R. Adam (Univ. Ruhr-Bochum, Germany) 10日 L. Huber (Univ. Vienna, Austria), A. Young (McGill Univ., Canada), H. Suzuki (Aoyama Gakuin Univ., Japan), C. Teufel (Univ. Cambridge, UK), N. Dan (Univ. Tokyo, Japan), N. Kondo (Keio Univ., Japan), Y. Yamazaki (RIKEN, Japan) 11日 M. Hasegawa (The Graduate University for Advanced Studies, Japan), M. Mimura (Showa Univ., Japan), Y. Terasawa (Keiko Univ., Japan), J.-Y. Girard (IML, France), M. Okada (Keio Univ., Japan)

平成20年2月9日より3日間、三田キャンパス北館ホールにおいて、“Rational Animals, Irrational Humans”という題名の第3回全体シンポジウムが催された。動物、ヒトを対象とした研究を行っている様々な専門分野の研究者たちが国内外より招聘され、GCOEの研究者たちとともに発表を行い、議論を戦わせた。

初日の9日は渡辺教授の開会の言葉で幕を開け、様々な種を用いた比較研究の発表が続いた。D.Lestel博士(ENS)により、動物の“rationality”についての様々な見解について論じられた。その後、A. Blaisdell博士(UCLA)、A. von Bayern博士(ケンブリッジ大学)、C. Schloegl博士(コンラートローレンツ研究所)、L. Castro博士(アイオワ大学)、A. Seed博士(マックスプランク研究所)、E. Freidin博士(オックスフォード大学)、R. Adam博士(ボーフム大学)による講演があった。内容は因果推論、視点取得、大脳半球機能差など多岐にわたった。比較の観点を持った推論研究では、自然な環境をシミュレートしたような場面での問題解決課題が多く利用される一方で、連合学習・古典的条件づけの枠組みによる可能性が論じられたのが印象的であった。セッション終了後、レセプションで参加者たちは親睦を深めた。

二日目は動物のみならず、ヒトについての研究も多く見られたセッションとなった。L. Huber教授

(ウィーン大学)は様々な種を用いた実験を紹介する中で、模倣場面において、ただ単純に行動をコピーするのではなく、ある理由に基づいて模倣すべき行動を選択することが子供とイヌに認められるという興味深い報告を行った。続いて、A. Young教授(マッギル大学)、鈴木宏明教授(青山学院大学)、C. Teufel博士(ケンブリッジ大学)、且直子博士(東京大学)、近藤紀子氏(社研)、筆者らのグループ(山崎・小川昭利博士・入来篤史教授、理研)による発表があったが、ヒトの社会的・物理的推論についての発達の・生物学的基盤に迫る内容であった。休憩時間には塾内のお茶の宗匠による点茶があった。

三日目は長谷川真理子教授(総研大)による発表で始まったが、最終日の朝にもかかわらず、子殺しの生物学的・社会的・文化的要因などをめぐり活発な議論がなされた。続いて、三村将博士(昭和大学)、寺澤悠理氏はヒトの社会認知についての脳画像研究についての講演を行った。午後はJ.-Y. Girard教授(IML)、岡田光弘教授による論理学からの話題提供があった。3日間の日程はフェアウェルパーティーで幕を閉じた。

休憩や食事などでのちょっとした会話の中で、何を以てrationalな行動とするか、という点に演者たちが苦慮していたようなことを耳にした。言うまでもなくrationalという言葉は多義的であるが、いく

らでも解釈の仕方があるために却って、研究の各論のみならず、発表者の立場や観点といった、学会発表などではなかなか聞くことのできない内容を聞けたように思う。発表後の質疑応答の時間が十分に確保されていたこともあり、それぞれの発表者の研究手法や実験対象、考察のレベルなどは全く異なっていたにもかかわらず、何がrationalか、という根っこの部分の問題を十分に共有できたのではない

かと思う。

なお、このシンポジウムの演者らによる論文に外部からの招待論文を加えて、シンポジウムと同名の論文集を慶應義塾大学出版会から刊行予定であるので、ご期待いただきたい。(山崎由美子)



G O E SYMPOSIUM

Rational Animals, Irrational Humans

Date: 9-11th Feb., 2008
Place: North Hall, Keio University (Tokyo)
Organizer: S.Watanabe (Keio Univ.)

SPEAKERS

9th Feb.	10th Feb.
D.Lestel (USA, France)	L.Haber (State Vienna, Austria)
A.Blaisdell (USA, USA)	A.Young (McGill Univ., Canada)
A.von Bayern (Frank. Graduate, UK)	H.Suzuki (Aoyama Gakuin Univ., Japan)
C.Schiffgals (NYU, Austria)	C.Trefel (Yale Graduate, UK)
L.Castro (Yale Univ., USA)	N.Dan (Yale Univ., Japan)
A.Seed (NYU, Germany)	N.Kondo (Keio Univ., Japan)
E.Freidin (Yale, Oxford, UK)	Y.Yamazaki (Yokohama, Japan)
R.Adami (Yale, Ruhr-Borchen, Germany)	

11th Feb.

M.Hasegawa (The Graduate University for Advanced Studies, Japan)
M.Mimura (Shizuoka Univ., Japan)
Y.Terasawa (Keio Univ., Japan)
J-Y.Girard (CNRS, France)
M.Otada (Keio Univ., Japan)
J-B.van der Henst (CNRS, France)

Keio University CARLS
Center for Research in Adaptive and Behavioral Systems
4-1-3, Kohoh, Yokohama, Kanagawa 223-8522, Japan
http://www.carls.keio.ac.jp TEL: 81-42-552-1114